

「必ず受け入れ」都内3施設指定

「病院探し」コーディネーター制



助産師や看護師が搬送先の調整にあたる周産期搬送
コーディネーター（東京消防庁）＝吉岡撮影

都道府県に対して読売新聞
が行ったアンケートによる
と、搬送コーディネーター
は、東京など10自治体で導
入され、医師や看護師らを
中核となる総合周産期母子
医療センターなどに配置し
ている。また近畿地方と徳
島、福井、三重の9府県が
2007年、府県境を越え
て妊産婦を搬送する広域連携
体制を結ぶなどの取り組みも
進んでいる。

NICU病床数は、厚労省の
有識者会議が示す必要数（2
・5～3床）に対し、3床以

してから約1年。東京都では、最重症の妊産婦は、必ず受け入れる新たな搬送システムを整備した。だが、全国的にも産科医療を取り巻く環境は依然厳しく、新生児を受け入れる新生児集中治療室（NICU）不足も続いている。（医療情報部 館林 牧子、社会部 石川剛、本文記事一面）

たらい回し問題 1年

都立墨東病院の妊婦死亡問題 昨年10月、脳出血を起こして緊急搬送先を探していた都内の妊婦（当時36歳）が8病院から「当直の産科医が一人しかいない」「NICUが満床」などの理由で受け入れを断られ、最終的にいたん断った東京都立墨東病院に運ばれたが、出産後に死亡した。

「お産後、出血が止まらない。命の危険がある」。呼び出して院内の妊婦の対応に当たらせるとともに、3人いる産科当直医が全員でこの女性の搬送を待つ。運ばれてきた女性は大量出血を起こしていたが

自宅待機中の産科医一人を呼び出し、院内の妊婦の対応に当たらせるとともに、3人いる産科当直医が全員でこの女性の搬送を待つ。運ばれてきた女性は大量出血を起こしていたが

輸血と子宮の周囲の動脈を繋ぐなどの緊急止血手術で一命を取り留めた。

都内の妊婦の数は搬送

はそれまで、かかりつけ医を通じて産科医が電話で受け入れ先を探す仕組みだった。運ぶ手はずを整えつつ、毎日いざれかに運ぶ手はずを整えつつ、毎日いざれかに

病院を探す。毎日いざれかに運用を開始した今年3月から、これまでに24人の重症妊産婦がこのシステムで輪番制で緊急搬送に備える。

運用を開始した今年3月

スキャナー SCANNER

日大板橋病院の3か所が指

定されている。

近くの病院で受けられな

い場合、かかりつけ医が1

～9番通報すると、東京消

防庁が「スーパー周産期」

に運ぶ手はずを整えつつ、毎日いざれかに

病院を探す。毎日いざれかに

運用を開始した今年3月

から、これまでに24人の重

症妊産婦がこのシステムで

輪番制で緊急搬送に備え

る。

運用を開始した今年3月